

平成25年の長野式症例検討会に出した症例です。

なかなか消えない右季肋部の(++)に対する処置から、副腎処置と腎の気水穴について考察を試みた症例です。

何故、右季肋部はこんなにも強い圧痛をあらわしたのか。

☆F・Yさん(45歳女性)

主訴：半年前から月経の度に膀胱炎になる。(岩島 信吾症例)

テーマ：肝の処置をしても消えなかった右季肋部の(++)が消えた処置

半年前から、月経の度に膀胱炎になるという事務職の女性。下腹部に鈍痛がして痺れたような感じがするので泌尿器科で検査をしたところ膀胱炎と診断。服薬をすれば症状は治まるが、月経の度に繰り返すのでこれは鍼だと来院。来院時は頻尿や鈍痛は無かったが痺れるような感じだけはあるとの事。

(随伴症) 後頸部の張り、バセドウ氏病(15年前から。現在とくに症状は無く検査の数値もほぼ正常値だがチウラジールはまだ服用している。)、子宮筋腫(経過観察中)

(脉状) 細・緊・数

(腹証) 臍・巨厥・鳩尾・右大巨・右中注・両天枢(+)、右季肋部軽圧(++)、中極・左中注(違和感)

(火穴診) 魚際・労宮・少府・大都(+)、然谷(左>右(+))、崑崙(左>右(+))

(局所診) 天膈に凝り、兪徑部(+)

(その他) 以前肩こりで来院したことがあり、その時の随伴症状がイライラと易疲労だったが、甲状腺治療に良いツボを教えて自宅施灸を続け、随伴症状は大分楽になったとの事。お灸が気に入ってここ数か月は自分なりに冷えや凝っているところに施灸をしている。その他に月経不順やPMS、疲れ眼などがある。

(処置法)

(初診) 最初の治療では右季肋部の(++)が取れず。

仰向けで中封・復溜・尺沢に刺鍼雀啄。右季肋部は柔らかいが軽圧で強い圧痛があるので、肝虚ではないかと大敦を押圧してみるも圧痛は取れず、それではと肝実処置として右漏谷、右郄門、右少海を追加するも一向に右季肋部の強い圧痛が取れず、試しにもう一度肝虚に方向転換して右大敦、右蠡溝、右陰谷、右曲泉、右期門に刺鍼雀啄するもまったく圧痛は取れず迷走状態に。

脉状が細・緊・数であり、45歳という年齢を考え更年期からの膀胱炎であること、そして右季肋部の(++)を副腎の機能低下による圧痛過敏やオツディーの反応が広く出ていることもありうると考え、先ほどの復溜・尺沢に兪府を追加し20分留鍼。細・緊がやや細やや緊になったところでその日は終了。自宅での蠡溝への施灸を指導。

(2診目) 初診日より8日後 初診日より調子は少し良いが下腹部のしびれ感はそのまま。

脉状は細・緊(数はなし)。右季肋部も(++)より少し圧痛は減っているとの事だが、やはり強めの(+)は有り。まず復溜・兪府・手三里・天膈に20分留鍼。その後手火穴と然谷以外は(-)。中極の違和感、巨厥、左大巨(+)
(+)消失。中極の違和感が抜けているのでひとまず安心するも、その他、とくに季肋部の圧痛は変わらず。続いて陰谷に刺鍼雀啄。然谷の圧痛を確認すると(-)。然谷がきれいに消失したことで念の為、季肋部を確認すると全く痛くない。右の天枢と右中注のみ少しだけ圧痛が残るが腹証、火穴はほとんど反応消失していました。伏臥位で大椎・天膈に雀啄し終了。その後の連絡で膀胱炎は収束したとのこと。

(治療後記)

年齢的にも更年期からの膀胱炎と推測でき、脉状も「細・緊・数」で副腎皮質ホルモンの分泌低下が起きているだろうと分かります。長野式治療での基本通り副腎処置が適応で、治療中痺れ感が収束したことからも膀胱炎の治療

はこのまま続けてゆけば良さそうだと考えられるのですが、今回右季肋部のとても強い圧痛が気になり、しかも副腎処置でもすんなり取れないのが、腎の気水穴処置で取れた理由を調べ直すこととしました。

まず、膀胱炎が更年期に出やすくなる理由は、卵巣機能低下によるエストロゲンの分泌低下です。新治療法の探求 p. 283 に「膀胱括約筋の緊張に関係深いエストロゲンの分泌が低下するために、尿道口のしまりが悪くなり、病原菌の侵入が容易になって、度々膀胱炎を起すことになる。」とあり、つまり言い換えるならばこの方の膀胱炎が脈状に裏付けられるように更年期由来のものであるならば、エストロゲンの分泌低下はあるということになります。

次に「更年期の生理不順で（腰の陽関）（上仙）（次膠）等の圧痛は、エストロゲンの分泌不全で肝機能が低下（肝虚）して、肩こり、あるいは（風池）周辺のこりや鬱血、眼の調節障害を来し、視力のかすみを訴えるものが多い。（新治療法 p. 213）」そして p. 209 には「生理不順の女子に（右期門）に圧痛のあるものが多いが、生理があり、これが終わるとこの圧痛は消失してしまうことが多い。」ともあります。残念ながら（腰陽関）などの圧痛は確認しておりませんが、エストロゲンの分泌低下で肝機能低下が起こること、そして随伴症状が後頸部の張り、疲れ眼などピッタリと内容が当てはまります。

つまり今回の右季肋部の強い圧痛は、エストロゲン分泌低下による肝虚だったのではないかと考えられます。肝虚は大敦の押圧で右季肋部の（++）の消失をみることで確認が出来ますが、今回のケースではそれが叶わず迷走しました。大敦の場所は複数試したものの全く変わらなかったのも、そのケースによってある程度押し続けないと圧痛は消えないのかは未だ定かではありません。しかしながら新治療法 p. 216 に肝疾患に対する経穴の運用「⑨肝機能の低下…太敦、陰谷、曲泉、蠡溝、肝俞」「⑩女性ホルモンの分泌促進…次膠、腰陽関」とあり、別記載されていることから、肝虚であってもエストロゲン低下による場合は組み合わせが必要という事でないかと考えられます。

～副腎処置と腎気水穴処置の考察～

では、今回何故、腎気水穴処置が功を奏したのか。それと同時に副腎処置との比較検討をしてみようと思います。今回副腎処置では季肋部の圧痛に対しては奏効しませんでした。と言っても 2 診目に多少の圧痛の軽減は診られたので効果が無いとは言えませんが気水穴処置の効果には及んではいません。

まずは今回の身体の状態をおさらいしてみます。

- ① 「細・緊・数」副腎皮質ホルモンの分泌低下（細：血管収縮）（緊：精神的ストレス）（数：交感神経過緊張）
- ② 「然谷（+）」
 - A) 副腎髓質ホルモン分泌亢進
 - B) 腎経に所属する何れかの臓腑器官に炎症、熱などの実証病変がある。
（腎経は主として内分泌系に参与し、泌尿器系に多く参与している（新治療法 p. 467）
（泌尿器系、婦人科系は主として「厥陰経」「膀胱経」に現われるが～～また間脳、下垂体、副腎、卵巣、自律神経にも深く参与しているので、「腎経」も見逃してはならない（30 年 p. 80）
- ③ 「右季肋部軽圧（++）」エストロゲン分泌低下からの肝機能低下
- ④ エストロゲン分泌低下からの膀胱炎

あくまでも推測ですが、エストロゲンの分泌低下と同時に起きた副腎皮質ホルモンの分泌低下、つまり更年期による卵巣機能低下のみだったら、副腎処置によって「然谷（+）」も消失していてもおかしくないかなと。つまりこの場合の然谷（+）は A) の副腎髓質ホルモン分泌亢進だと言えます。副腎処置は副腎皮質ホルモンを分泌促進させて副腎髓質ホルモンの分泌を抑制するように働く為です。ではここで「然谷（+）」が現わしていたのが、B) の腎経が参与している臓腑器官の実証病変だったならばどうだろうということです。婦人科器官そのものの炎症や病変状態に起因するエストロゲン分泌低下ならば、副腎調整のみよりも、水穴である陰谷を用いた気水穴処置の方が効果を期待出来る

と言えそうです。(新治療法 p. 470「卵巣炎とか卵巣膿腫というような婦人科疾患に非常に重要な経穴である。)

※もしくはこの方は現在症状無しで検査でもほぼ正常値になってはいますが、甲状腺機能亢進症(バセドウ氏病)でもある為、腎火穴圧痛陽性は甲状腺反応である可能性も捨てきれません。(甲状腺異常が卵巣へ与える影響はあるがメカニズムはまだ完全には解明されていないとの事。)

卵巣の病変の確定も終えてない乱暴な考察でしたが、あえて取り上げたのは今回のようなケースで然谷や右季肋部の圧痛を元に、副腎処置と腎気水穴処置を明確に分けて考えることで、婦人科疾患の可能性を長野式診断により浮き彫らせることが出来はしまいかということと、今回の症例にぶつかり、今まで何となしに所見が消えてしまい忙しさにかまけて深く考えることを後回しにしてきた為、今回は長野潔先生の著書を部分的に読み下し考察を試みてみようと思った次第です。

結論からいうと

◇ 副腎処置は腎虚・腎実双方に効果があるが、内分泌・自律神経への作用であり悪循環の輪の修理による身体の改善処置(例えるならば身体を1周している水路にきれいな水を流し続けて身体をきれいにするような?)

《副腎処置は副腎皮質の機能低下を調整賦活し、副腎髄質の亢進(交感神経過緊張)も抑制することから、腎実に適用でき(ストレス学説でいうところの抵抗期)、そして副腎髄質が低下(交感神経機能低下)してしまっているという腎虚(前記学説でいうところの疲弊期)にも副腎皮質ホルモン調節と兪府の作用による副甲状腺ホルモン(パルソルモン)調節により内分泌機能の歯車をうまく回してあげる作用により適用できますし(血清カルシウム上昇、活性型ビタミンDの合成促進、腸管カルシウム吸収促進)、30年の軌跡のp. 162にある兪府の考察においても、兪府の効果は交感神経の興奮を呼び覚ますことが示唆されており(もちろん下腿腎経経穴とのセット鍼により行き過ぎの交感神経興奮は抑えられる)、それに伴い副腎髄質機能の賦活を行っていると言えるので適用できます。》

◇ 腎経の腎気水穴処置は、ホルモン調節でなく、内分泌系(泌尿器系もだが…)に関与する実質器官の炎症、病変に作用し、結果的にホルモン分泌の正常化に寄与する処置

《腎経に限らず、腎気水穴処置はその経絡に所属する何れかの臓腑器官に炎症、熱などの実証病変へのアプローチ》

(考察後記)

何度、読み直しても「30年の軌跡」「新治療法の探求」の奥深さには驚かされるばかりです。行き詰まった時には、しつこくページを開き、読み解くことをオススメします。